

十七文字の灯ひしちもと

小山 多由美

私の父は中学の国語教師だったが、休みの日にはいつも畳の部屋に布団を敷いて休んでいた。休日に行われる地区の行事があっても父が参加することはなかった。私たち家族は慣れっこになっていたが、運動会で父と一緒にお弁当を食べることができないのが淋しかった。

十代の終わり頃まで、私は目が覚めると父が冷たくなっているような予感に襲われることがしばしばあった。「おとうさん」と心の中でつぶやきながら、そつと襖ふすまを開けて父が息をしていることを確かめたこともあった。

そんな父は一九三〇（昭和五）年、福岡市馬出まいで（現・東区）で野菜農家の次男として生まれ育った。当時多くが藁葺屋根だった頃、「馬出」電停に近い瓦葺二階建ての父の家は珍しかった。一つ年上の兄を筆頭に、父の下には尋常小学校時代に三人の弟妹がいたので、年子が続く五人の子どもを囲む食事は賑やかだった。食べ盛りの子どもたちは親の目を盗んで食卓の惣菜（おかず）を食べていたそう。油断していたら、食べ損なっていた」と笑って話してくれた。

一九三七（昭和一二）年、支那事変（日中戦争）勃発とともに、祖父は中国戦線に出征した。しかし、重い脚気かかにかかって二年後に帰還した。小倉の陸軍病院で療養後再び赤紙

（召集令状）がきて佐世保の砲台に勤務するが、一年後には帰還した。その間に二人の弟が生まれたので、子どもは七人に増えた。終戦の一年前に祖父は肺結核を発症して、三日目の赤紙が来たけれど、応召出来ずに二階の部屋で療養していた。

しかし、一九四五（昭和二〇）年、祖父は敗戦のショックと極度の栄養不良で病状が急速に悪化し、一月四日に亡くなった。まだ四十歳の若さだった。残された七人の子どもを抱えた祖母は当時三七歳。自分の幸せを顧みる暇もなく、祖母は母子家庭の生活を支え、子どもたちを一人前に育てることに追われた。

父は小学校六年生の終わり頃から、時々ぼんやりするようになった。大丈夫といわれて旧制福岡中学を受験するが、身体検査でひっきり受験に失敗する。やがて、肋膜炎（結核性）になって一年間九大病院小児科に入院した。

健康になるために県立福岡農学校に進学して午後は戸外での農場実習をする環境の中で、少しずつ父は健康を取り戻していった。

しかし、進路を決めるにあたって大学進学を希望して猛烈な受験勉強に取り組み、その無理がたたって一九歳の時に父は祖父と同じ肺結核を発症した。その後、人工気胸療法で何とか大学に進学し、二三歳で中学の国語教師となる。国語という教科は単に生徒に教えるだけではなく、自らも何らかの創作活動をしなければならぬと考えた父は、体力がないことを考慮して俳句を作ることにした。

教職の傍ら投句なげうしていた父は、二四歳の時に初めて俳誌に掲載された。水原秋桜子みずはらあきざきが主宰する俳誌「馬酔木」である。

台風の後の藁わらを食ひにけり

入退院を繰り返しながら石田波郷いしだなまごの「鶴」に投句して掲載された句が残っている。

檻かご棲すぎれのごとき冬空うごくくなり

父にとって、俳句は心の支えだったのだと思う。

一九六〇（昭和三五）年、三〇歳になって結核の小康状態のとき、父は見合いして母・ソヨ子と結婚する。五人の弟妹の進路を考えた時、父にとって就職と結婚は避けては通れない現実の問題だった。

結婚後一年後に私が、さらに一年後に弟が生まれた。

初めての男子誕生に嬉しかったのだろう、弟を取り上げた句が多い。

一文字に蚊の翔びきしよ吾子歩む

子煩悩の父は、私たち子どもの句を数多く作った。

冬夜一刻父子の団欒入浴す

三四歳の時に結核を再発したため、宇美中学校に担任としてクラスを受け持っていたが、体調がすぐれず、止む無く休職した。国立療養所福岡東病院で、一九六四（昭和三九）年に左肺上葉と肋骨五本を切除する大手術を行った。

手術後、麻酔から覚めたときの状況を詠んだ句がある。

夕焼けて地獄のベッド黄金なす

術後の体力が落ちて意識が朦朧としている中で作った俳句だろう。当時私は三歳、弟は二歳だった。松林の中で、久しぶりに会う父を囲んで嬉しそうにはしゃいでいる私と弟の写真がある。

日を追うごとに父は少しずつ健康を取り戻していった。その時の安堵の気持ちが句となつて残っている。

残照へ蟹のつぶやき祈りたし

復職後、普通中学校に勤めることが体力的に負担になったので、勧める人がいて一九六七（昭和四二）年、父は古賀中学福岡東病院分校（現・県立古賀特別支援学校）に転勤した。

病院に入院している中学生の患者に対して行われる少人数の病・虚弱児教育は病弱な父

に最も適した職場でめきめき健康を取り戻して、家族旅行や庭作りにも精を出すようになった。身近な出来事や雄大な自然を詠んだ句が印象深い。

行きすぎてわれを待つ目のトンボかな

緑陰を横目に猫の通りけり

（阿蘇山にて）

溶岩の苔の翠かなしも霧の中

（広島原爆の碑の前で）

炎日の碑のやさしさよ哭くばかり

休職六年を含めて三三年間の教職生活を送ることができたのは父にとって幸運だった。在職中も中村草田男が選者を務めた「文芸広場」、教職員組合の「望玄」、その他の文芸誌に父は投句を続けた。

退職後、絵が好きだった祖母の影響で、父は朝日カルチャー福岡教室で水彩画を学ぶことにした。

学童期以後絵を描いたことがなかったので、在職中に「美術」を教えねばならないことになった時、生徒から「これが先生の絵？」と笑われる程度だった。

しかし、毎週月曜日になると幼子のように水彩用具や紙をそろえ、いそいそと教室に通った。季節を詠む俳句は風景を描写することでもある。自分の心情を俳句で詠むこと、自分の内面を表現する絵画、特に水彩画に父は共通点を見つけたようだった。

当時、日本機関誌協会会長を務めた森一作が水彩教室で毎月、会報誌「わらべ」を発行していた。その後、森氏の後を継いで父が会報を発行するようになり、コラムの末尾に自分の句を一句、掲載した。水彩教室の情景を詠んだ句がある。

裸婦一人立ポーズして花冷ゆる

講師の猪又徹氏は、外国の街並みを水墨画でスケッチして旅を続けて、個展やグループ

展で作品を発表するスタイルを貫いた。そんな猪又氏を慕って、一九九〇（平成二）年、彼を講師に招いて父は福岡市内で風景画を描くスケッチの会を立ち上げる。この集まりに「ぐるーぶ・街」と名付けて、酷暑期と厳冬期を除いて、月一回福岡市内でスケッチ会を企画し、毎月会報を発行した。そして、この会報のコラムの末尾に自作の俳句を掲載した。葉桜に塵浮く街のひかりかな

自宅近くを散歩した時の句は、私が好きな一句である。

蛙 犬子供 われ川に白き雲流れ

清涼飲料水のような爽やかさがある父の俳句には、ファンが多かった。

一九九九（平成一一）年、父の兄・典一が六九歳で亡くなった時には次の哀悼句を詠んだ。

同胞の棺を花野へ向けてやる

父が七七歳の時、宇美中学校の教え子が喜寿の祝いの会を企画したので、その御礼に俳句集を自費出版して配った。俳句歴五〇年以上の全作品の中から一一四句を選び、ルビをつけて誰でも読めるように気を配って編集した。

八〇歳を超えた頃から、父は急速に体力の衰えが目立ってきた。会報が二年目に入った春、「ぐるーぶ・街」の会報の編集・発行を娘の私が引き継ぐことになった。会報の末尾には今まで通り、父の俳句を掲載した。

そんな父に、危機的状況が訪れた。

二〇一二（平成二四）年一二月、圧迫骨折で入院した父は、肺結核のために左肺を切除したことによって二酸化炭素が体内に溜まりやすい状態が続き、一週間後に整形外科病棟から内科病棟に移った。そしてついに、二度の意識不明に陥った。年末には何とか回復したものの、年が明けて二度目の意識不明の時に母と私は病院に呼ばれた。主治医は父が意識を取り戻すためには「挿管」の処置を施して二酸化炭素を減らすしか方法がないことを

告げ、最悪の場合は延命処置を施すかどうか、結論を出してほしいと言われた。東京に住む弟に相談して、八二歳という高齢であるので延命処置は断った。私たち家族は静かに父を見守ることを選んだ。

「今まで何度も危ない状況を渡ってきたから、兄ちゃんは絶対に大丈夫よ」

個室を見舞った父の妹はそう言って、母と私を励まして夕方帰った。

その夜、私は千葉県在住の父の末弟に現在の状況を葉書で知らせた。

数日後、その叔父から電話があった。

「兄貴に俳句を作らせて！ 兄貴は俳句で何度も立ち直ってきたんだから」

挿管の状態で父とは話せないし、どうやって俳句を作らせたらいいいのかわからなかった。困り果てた私に「五〇音表を作れば、兄貴は俳句が作れるはず」と叔父は言い切った。

父の弟妹の言葉は重く私の心に響いた。しかし、父は心身ともに弱り切っていて、果たして俳句が作れるのか、私は疑問に思った。

幸い医師の処置はうまくいき、強靱な父の生命力のためもあるが六日目に挿管を外す処置が行われた。再び一命を取り留めたものの、夜間の人工呼吸器の装着が必要となった。体力が低下している父にとって、厳しい状況が続いていることに変わりはなかった。六日間の挿管に伴う点滴のためだろうか、管が外されても父は流動食を食べようとしなくなった。讒言をしゃべるようになり、自分が生きているのか、死んでいるのか判断ができない状況が続いた。母は「あんなに食事を摂らないならお父さんは今度こそダメかもしれない。葬式代を準備しようと思う」と言って、銀行に行ってお金の準備を始めた。

父の急変に気が動転しながらも、私は編集者として「ぐるーぶ・街」の会報二月号（二五九号）の発行を休むわけにはいかなかった。

私は俳句の掲載がない紙面を準備して会報を発行することにした。二二年間父が毎月紙面に発表した俳句。わずか十七字ではあるが、その尊い一行が今まさに消えようとしてい

る。十七字の重みに気付いた私は、寂しさと悔しさと胸が痛んだ。

「残念ながら、二五九句目の俳句を皆さんにお届けすることはできなかった」とコラムに書いて、会報の下書きを母に頼んで父に届けてもらった。

あきらめていた私に、意外な展開が待っていた。帰宅した母はやや上気した顔で、「お父さんが病床で俳句を作った」と言った。

猫柳咲くやらむわが花も

母と私は、父の俳句が書かれたメモを前に胸が詰まった。父はまだ話ができる状況ではなかったし、もちろん字も書けなかった。約一週間、父は手足を紐でベッドに縛られていたために、鉛筆を握って書こうとしても字にはならなかった。ベッドの傍らで父の気持ちを汲んで母がこの一句を書きとるまでには、かなり時間がかかったようだった。父が書く紙の字を母が確かめながら、ノートに書き取っていた。俳句を作り終えた父は昏々と眠り続けた。

俳句はまたも父の命を救った。

心療内科の先生もみえるようになり、お見舞いの方から頂いた苺を父は口に運ぶようになった。そして、病院に対して流動食をやめるようにと自分から看護師にお願いして、少しずつ普通食を口にするようになっていった。父は個室の窓から少しだけ空が見えると喜び、外への世界に目を向けるようになっていった。二月半ばに、呼吸器のリハビリができる病院へと転院した。

大部屋に移った父は窓の外の梅の花を愛で、花に寄ってくる小鳥を詠んだので、三月の会報に掲載した。

小鳥翔ぶや芽吹き枝の弾みけり

俳句から、私たちは確実に父が快方へ向かっていることを信じた。

窓の景色は桜が咲く季節を過ぎ、初夏の風が感じられるようになって、五か月ぶりに退

院して、父は我が家へ帰ってきた。病院でのリハビリは終了したものの、起き上がるにも支えが必要な父にとって、自宅は決して居心地は良くなかったと思う。六月の会報に掲載した句には、現実の厳しさがよく表れている。

失禁して裸にさるゝ初夏の夜

七月の会報には、自分の姿を鏡で見た心境を冷静に振り返っている。

夏至の夜半鏡に映る我はよるめく

慌ただしい日々の中で順調にリハビリが進み、季節の移り変わりに目を向けるようになった。八月の会報の句はリハビリの句ではなかった。

炎熱の日々なれど今朝は茗荷立つ

父にとつて俳句とは何だったのか。蝸のように、命尽きるまで俳句を作り続けるのかもしれない。喜寿の俳句集の中に次の一句がある。

かなかなや魂消ゆるごと声やみぬ

また、父は同集の中に両親のことを詠んだ二句を選び、その霊に手向けた。

稲の露母はわが背に語り飽かず

酔へば真実父と酔ひたし草の露

今年五月一〇日、父は退院して一年を迎えて、「要介護二」から「要支援二」へと軽くなった。最新号（二〇一四年五月号）の会報に掲載した句は、ユーモアと老境を感じるこ

とができる。

花散るや恍惚の人となりて行く

これからあと何回父と桜の花を見ることができのだろうか。しかし、俳句を作り続けている限り、その命は灯し続けられるのだと私は信じている。